

～風景を編む～ 夕風の唄

Concept 風景を編む

家の中で過ごす時間というのは、秒や分といった定量的な時間ではなく、そこで体験した出来事やその連続によって認識するような物語的な時間である。

その中で家から見える風景の体験は、住む人にとって原風景となる。

この敷地では、夕日や街並みを見下ろす景色が、印象的な場所であった。

この場所に既にある風景を集める・切り取る・組み合わせる等の編集をし、そこに新しい居場所を添えることで、住む人にとって、街に住まうということをも物語のような、優しく大らかな居場所として感じることが願った。

風景を編む、それは人と街の関係を再編する建築の提案である。



風景1『坂道』

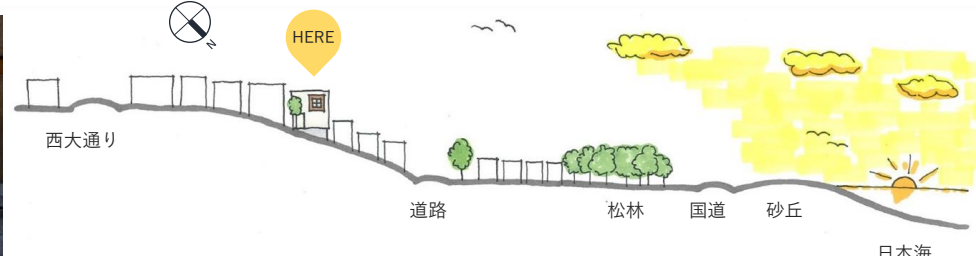


敷地は西大通りから、入り込んだ先にあり、交通量も限られ、周辺は静かな街並みを形成している。

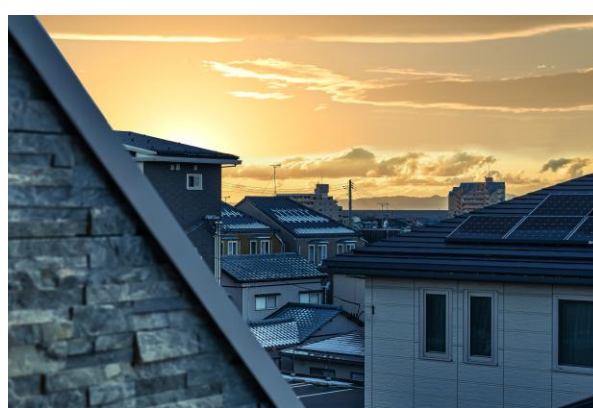
また北西傾斜地のためグラウンドレベルが北へ低く、南東側は隣家の影になるのに対し、西側は庭や駐車場に面していたため開けていた。そこで、敷地の西に庭を設けることにした。

またこの敷地が、坂道の角の小高い丘のような場所に位置することから、街や防砂林を展望できることに気がついた。

そこで街並みを見下ろす景色を家の中に取り込むことにした。



風景2『夕日と夕風』



航空写真から、敷地を始点に西へ軸線を引いていくと、防砂林がちょうど切れており、2棟のマンションの間を抜けて1.2km先の日本海にまで、繋ぐことができた。

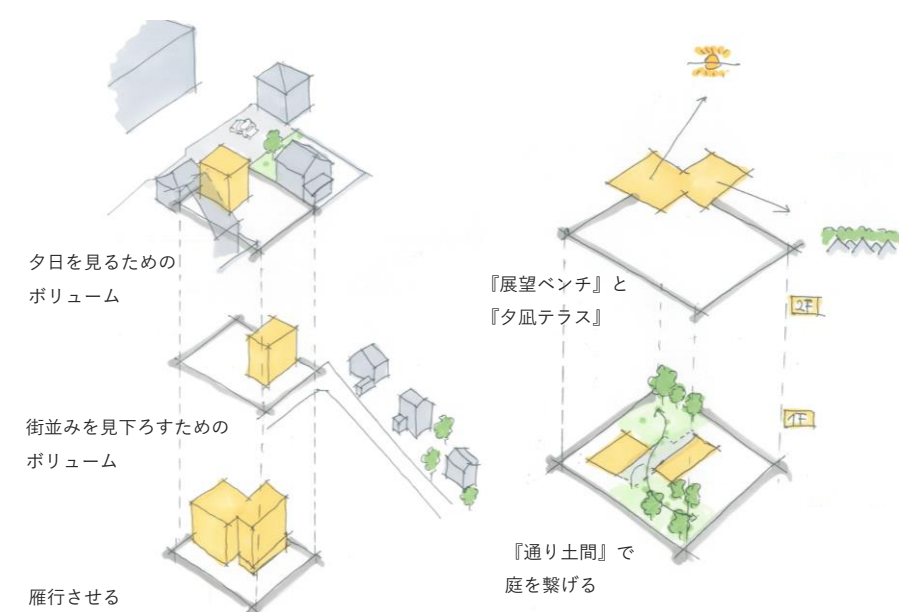
そこで、高い位置からの視点があれば、春分と秋分には、真西の水平線に日が沈む様子を眺められることを発見した。

また夕方には海風と陸風が交替する、一時無風の『夕風』と呼ばれる状態になる。

曇りがちで、海陸風や季節風の影響が強い風土の中で風が一時的に静まり、夕焼けにより空が赤やオレンジに染まる、穏やかでドラマチックな風景に焦点を当てた。

全体構成

建物のダイアグラム



建物の配置として、西の夕日を見るためのボリュームと、北東の街並みを見下ろすボリュームの組み合わせとして、履行形を選んだ。

また西に設けた庭と、風景を連続させるべく、玄関までのアプローチにも庭の要素を設けることにした。更に、家の内部に通り土間を設けることで、前庭と裏庭が繋がり、外部空間が中にまで侵入してきているような構成にした。

シンプルな履行形ではあるが、外部との関係を豊かに築く内部空間を創出することを狙った。

物語とシーケンス



西の夕日を見るための、高い視点に向けて、ひとつながりの物語のシーケンスを設計した。

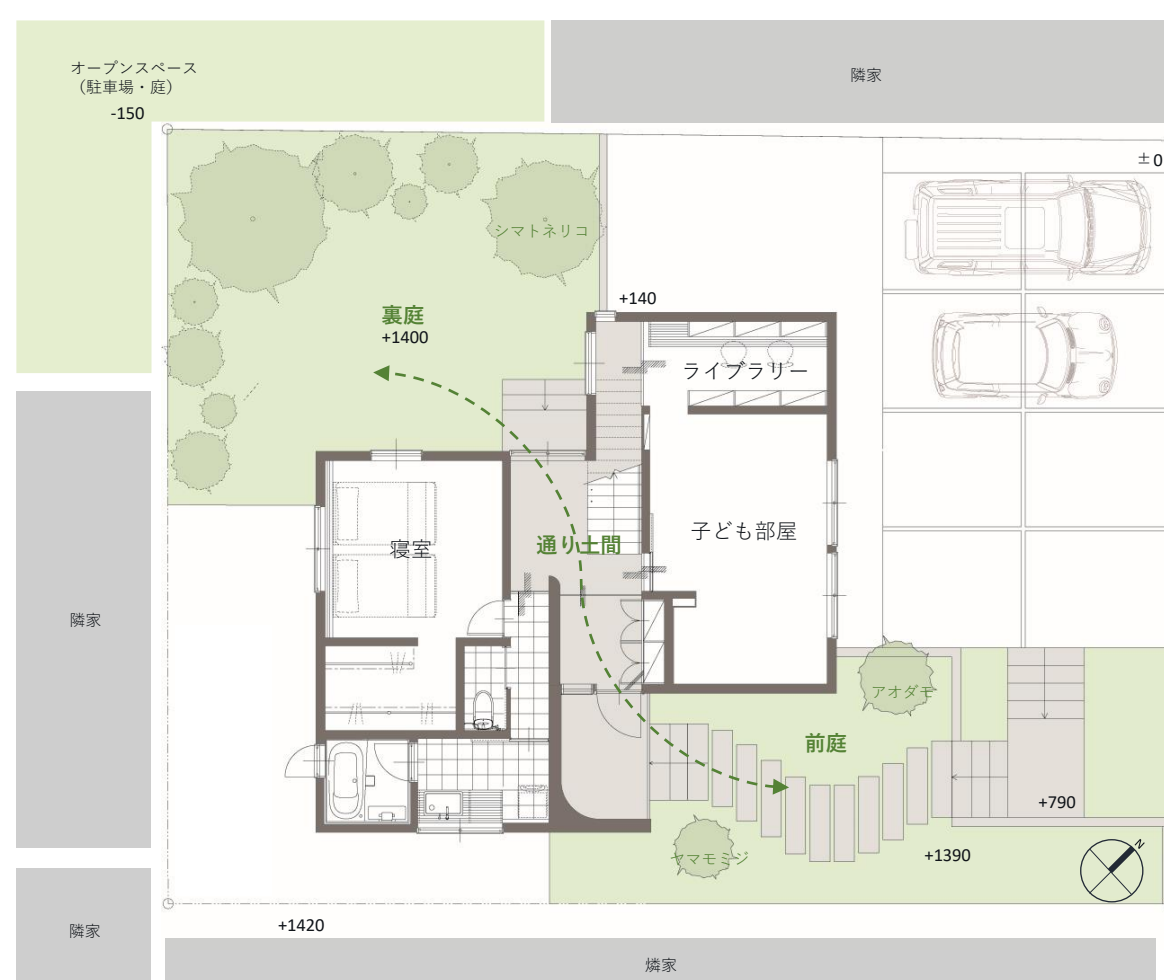
物語の舞台は、「小山」のような坂道に位置する敷地。アプローチの「丘」を通過して中に入り、階段を登ると、街を見下ろすことができる『展望ベンチ』がある。そして、最後に『夕風テラス』へ辿り着く展開になっている。

また場面の変化には、きっかけや伏線があるように、空間にも繋がりを作るため、動線に余白を設け、境界を曖昧にした。

家にいながらも、どこか街にいるような、家から一步出た先も、なんとなく家にいるような、不思議な感覚になる。

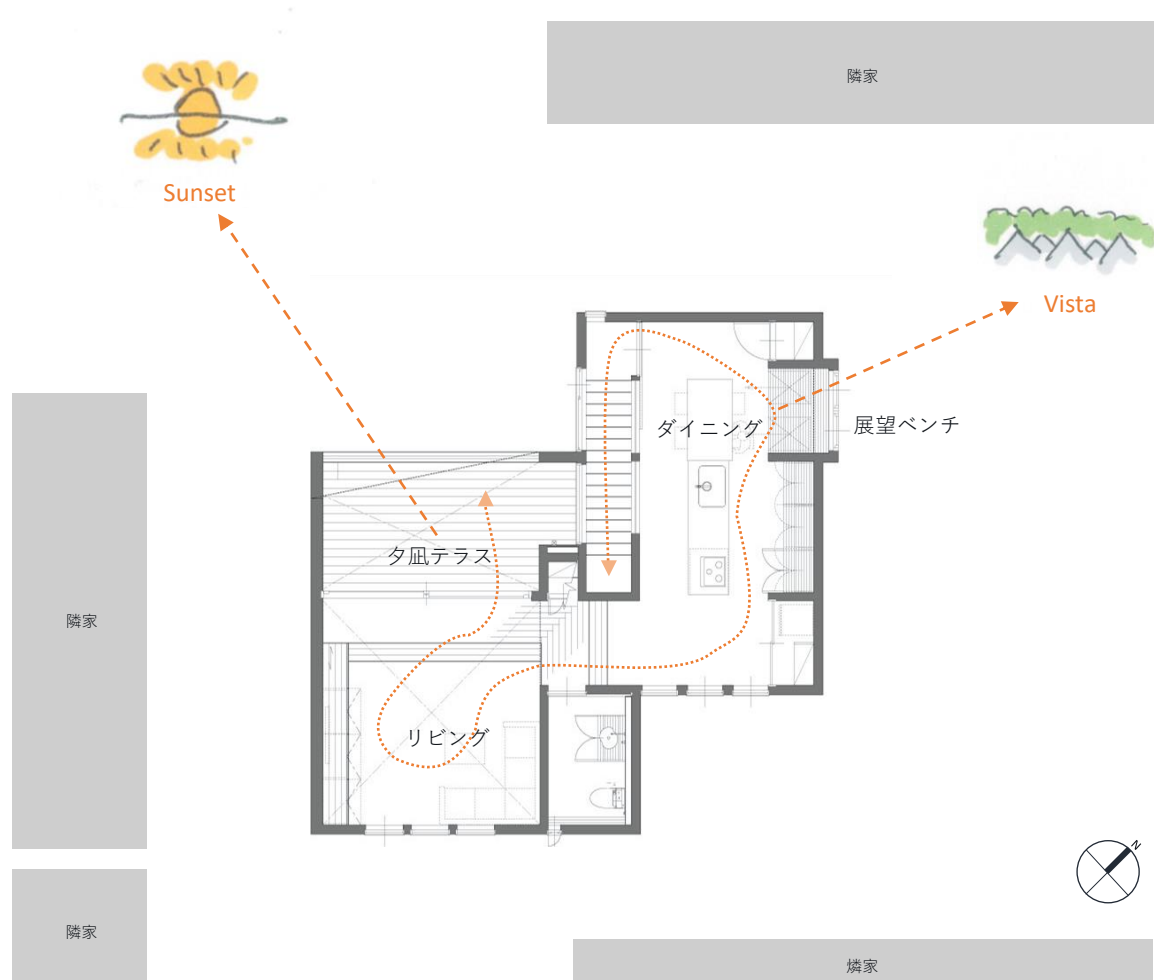
1F PLAN

通り土間によって、裏庭と前庭を繋いでいる。またライブラリーまで土間が続くことで、土間は子どもにとっても居場所の一つとなり、好きなものを飾ったり、遊んだりなど、半分外にいるような感覚でも過ごせる。



2F PLAN

展望ベンチのあるダイニング、夕風テラスのあるリビングの2つのゾーニングとする。ぐるっと回るとある動線の中に見えてくる景色や空間が変わるリズムのある展開となっている。



「丘」外観

外観は白い塗り壁、米杉と木製格子窓のシンプルな構成。丘を登るようなアプローチとすることで、坂道という敷地の特徴や裏庭・自然へと風景をつなげることを意識した。



ポーチ

モルタル床、Rの塗り壁、天井の羽目板は、玄関の中まで、ひとつづきの同じ素材にしている。境界部分をガラスにし、吸い込まれるように中へと入っていく。



「通り土間」

入ると裏庭の緑が目に行くように掃き出し窓のみを透明ガラスにした。奥のスリット窓はフロストガラスにして、隣家の存在感を消している。光と緑だけを感じる空間にすることで、絵や緑を飾ったり、読書をしたり、何かしたくなるような半屋外の場所とした。



「展望ベンチ」ダイニング

ダイニングの主役は展望ベンチとし、街並みの景色を切り取っている。朝食や夕食のときに、何気なく青空や明かりが灯る風景が見えることで、ここで暮らす家族が、大きな町の一部に住んでいることを認識し、家への愛着が家の外にまで伸びてほしい、という施主の願いを込めた。



廊下

物語の変化には、場面ごとの繋がりがあるように、廊下を1間幅にすることで余白を持たせ、緩やかなシーケンスを作っている。



「夕風テラス」リビング

リビングとテラスは一枚のアガチスの天井と2間半の開口により、一体の空間となっている。1間半の軒の出は、冬の海風や真夏の西日から住空間を守る役割も担っている。タイルの壁面は、隣地の住宅街の存在感を消し、開けた北西側の景色に視線を向ける働きをしている。



「夕風テラス」スキップフロア

2段のスキップは、開放的な空間の中でも開かれた安心感を得ることができる。そして夕暮れ時には、部屋全体が赤く染まった非日常空間となり、日常の喧騒から切り離れた落ち着いたひと時を過ごすことができる。

夕風の唄

夕暮れが近づき、雑木林のアプローチを歩き、柔らかなアールのアルコブを抜けて、まっすぐな階段を登った。

太陽が少しずつ高度を下げてスクエアな展望ベンチをピスタとともにオレンジへと染えていく。

遠くの海の香り、波の音も聞こえるような感覚に誘われ、テラスへと向かい、大きな木の窓を開いた。

アガチスの天井と2間半の開口により、一体の空間となっている。

ゆったりとした、高台の時間が始まる。

ここは夕風テラス。